

「お願い、おトイレに、トイレに行かせて下さい」

麻美が、涙に濡れたすがるような瞳を平尾に向け、下腹部の重い苦痛に急かされるように恥辱の言葉を繰り返す。

そんな彼女を見下ろしている平尾が、冷笑に歪んだ唇で答える。

「せっかく栓をねじ込んでやったんじゃないか、もう少し我慢しろよ」

「そんな……。苦しいの、とつてもお腹が苦しいんです、だから、お願いです、本当に苦しいんです……」

麻美が泣き顔に表情を歪め床から哀願するが、平尾はそんな彼女の表情を見下ろして更に笑みを深める。

「どうやらまだ躰が足りないみたいだな。美佐子、鞭を貸せよ」

美佐子から鞭を受け取った時、平尾の瞳は冷酷な光を増し、その奥には強い欲情の昂ぶりがきらめいていた。

「オレは我慢しろと言ったんだぜ。聞きわけのないペットだな、お前は！」

平尾が鞭を振り上げ、その残酷な責具の軌跡を麻美が恐怖の視線で追う。

「イヤっ！ 叩かないで、お願いです、お願いっ！」

鞭は床に横向きに転がる麻美の腰に向かって振り下ろされ、見事な音が鳴った。同時に彼女が張り上げた苦痛の絶叫が部屋に響く。

「尻を上げろ！ さっきのように高く上げるんだ！」

昂ぶりを深めた声で平尾が叫ぶ。

足元に這う麻美が、すすり泣く声を漏らしながら身体を起こしていく。腹這いになった時、便意に苦しむ下腹部が床で圧迫され、張り裂けるような苦痛が彼女を襲った。

平尾は自分の足元で、両手を拘束された不自由な身体で懸命に自分の命令に従おうとする麻美を見下ろし、嗜虐の性を剥き出しにした微笑を浮べる。

ようやく麻美が肩と首で体重を支え、尻を掲げた時、平尾が背後に回り込み、彼女が差し出す白い2つの肉の半球と、その狭間に埋められた黒いゴム栓、そして釣糸によって縫われた、血に汚れた性器を見詰める。

嗜虐が昂じ、その感情の命じるままに彼が鞭を大きく振り上げ、そして再び麻美の尻を打つ。

「ああっ！」

麻美が甲高い悲鳴を張り上げ、その白い尻に新たな鞭跡が刻まれる。

「数えろっ！ 20回鞭打った後、出さしてやるぜ」

平尾が更に大きく鞭を振り上げる。

肉を打つ音が響いた後、苦しい息とともに、掠れた麻美の声が漏れ出した。

「い……1回……」

*

厚い肉と、細く鋭い鞭との間で生じる鞭音。尻を打つ度に手に伝わってくる感触。甲高い悲鳴が響くたびに尻に刻印されていく赤い線。それらのものが平尾を掻き立て、嗜虐の卓に響せられた麻美の尻に、狂おしい程の欲情を感じる。

部屋の中に、尻肉を打ち据えられる音と、細い鞭が空を切る音が充満し、その音に、平尾の吐く熱い息の音が混じり合い、切れ切れの甲高い悲鳴が交差する。

やがて、麻美が数える鞭打たれる数が、苦痛の吐息によって不明瞭となるが、昂ぶりきった平尾は、自分の腕のたるさにも気付かず鞭を振り下ろし続ける。

*

「じ、十九……」

麻美が絞り出すような声で数を数えた時、振り上げた鞭を平尾が止めた。

当然襲って来るだろう鞭の苦痛に身構えていた彼女が振り返る。

息を乱した平尾が鞭を下ろす。

麻美が先程からいつそう激しくなった便意による苦痛を感じながら、問いかける。

「何故？……」

「二十回目はおあずけだ……」

平尾が冷笑を浮べる。

「だめっ。もう、もう、お腹が……、我慢出来ない……」

そして彼女のその言葉を証明するように、肛門に埋め込まれたゴム栓が、内部からの圧力によってヒクヒクと動き、切羽詰った腸の蠕動音が下腹部で鳴った。

麻美が哀願する。

「お願い、お願い、もう、これ以上……」

「どうして欲しい？」

唇を噛み、一瞬の躊躇の後、彼女が言った。

「鞭で打って、打って下さい、わたしのお尻を叩いて……」

平尾がひとときわ冷酷な薄笑いを浮かべ、大きく鞭を振り上げる。

「聞きたかったぜ、その言葉をな」

彼の振るった鞭は、縦の方向で麻美の尻の狭間に向かって飛び、傷ついた性器を轢し上げた。

「あああああ!!」

麻美が絶叫し、剥き出しの性器を打たれた苦痛に床に転がった。

「数えろっ! それとももう一度最初から叩かれないのか!」

「……に、二十……」

麻美が消え入りそうな声で囁き、がっくりと頭を垂れた。

*

風呂場の下水口の真上に、赤い鞭跡が縦横に走った麻美の尻が、2つの豊かな曲線を描き出す。

その肉の曲線の狭間の頂点、肛門には、黒いゴム栓がまだ捻り込まれたままである。

洗場のタイルの上で屈み込む麻美の傍らには、全裸の美佐子が立っており、風呂場の入口では、同じく全裸の平尾が固く陰茎を勃起させながら、ビデオカメラを覗き込んでいる。

「早く、早く抜いてください……」

背中で拘束された両手を揉みしだくようにして、下腹の苦痛に耐える麻美が美佐子に訴える。

「ウフフ……麻美、あなたそんなにお尻から汚い物をひり出すところを見てもらいたいの……?」

そんな理不尽な言葉にも、抵抗する気力さえなくしている彼女の傍らに、美佐子が膝をつき、彼女の肛門に埋められたゴム栓を挿んだ。

「どうなのよ、答えなさいよ」

美佐子が、麻美を更に追いつめるように、挿んだゴム栓を上下に動かし、肛門を擦り上げる。

平尾が、ビデオカメラのスイッチを入れ、肛門を騷られる麻美の姿をビデオカメラに収めてから、下水口の上に据えられた麻美の尻をクローズアップする。

「よし、いいぜ」

平尾が合図すると、美佐子が挿んだゴム栓をゆっくりと麻美の肛門から引きずり出しはじめる。

「ほら、もう少しでお前が汚い物をだすところを撮影してもらえるのよ……。嬉しいでしょう? 麻美……」

「……」

瞳を閉じ恥辱に耐える彼女に、美佐子が半分ほどを引き出したゴム栓を、再び力を込めて押し上げ、肛門にねじ込む。

「うぐっ!」

膨満した腸管を押し上げられる苦痛に麻美が重い声を漏らし、そして、すすり泣きの混じった声で美佐子に言う。

「は、……はい、嬉しいです……」

「イヤらしい娘ねえ、お前は……」

美佐子が嘲り、そしてゴム栓を一気に肛門から抜きさる。

「ああ！……」

ゴム栓が肛門を極限まで押し広げ、そして奥の赤黒い秘肉をめくり上げるようにして、抜ける。すぐ後を、肛門から溢れだした恥辱の塊が追う。

その光景を刻銘にビデオに収め続ける平尾の口元が笑いの形に歪み、風呂場の中に異臭と、麻美が上げる甲高いすすり泣きの声が満ちた。

麻美の肛門から激しい勢いで噴出した汚物が、尻の表面と下水口の周辺に飛沫を残しながら、下水へと流れ込んでいく。

麻美が洗場に膝を落とし、声にならない嗚咽の声を吐き出し、そして強烈な便意が下腹部から消え去っていく時の、性の快感にも似た感触を味わう。

腰から下の力が、汚物と共に流れ出してしまったかのように、麻美は深く息をつき、そして性器の小穴から薄く色付いた尿を漏らす。

そんな彼女の惨状を、淫らな微笑みを浮べて見詰めていた美佐子が立ち上がり、壁のフックにかけられていたシャワーを外す。

冷水が麻美の全身に降りかかる。

「ひっー！」

麻美が驚きの悲鳴を上げ、全身に振りかかった冷たいショックに身を震わせ、下腹部が反射的に引き絞られた。

美佐子は冷水に震える麻美の尻にシャワーを向け、汚物の飛沫に汚れた尻と、下水口の周辺を洗い流していく。

「さあ、お楽しみの時間よ、麻美。お尻を犯してもらえるのよ……」

美佐子がシャワーのノズルのネジを外しながら囁く。多分、幾度がこういった目的に使われている為であろう、ノズルは簡単に外れた。

「でも、もっと奇麗にしなくっちゃね。ご主人様の大事なところを汚しちゃいけないものね」

洗場に膝をつく麻美が、頭を低く垂れ、嗚咽の声を漏らす。

美佐子が、今ではまとまった水を吹き出すホースの先端部分だけとなったシャワーを、麻美の尻の狭間にもってゆき、もう片方の手で彼女の髪の毛を掴み上げる。

顎を上げられ、背中を逸らす麻美の肛門に、ホースの先端が触れ、吹き出す水の圧力を押さえ込むように美佐子がそれを押しつける。

「ああああああ……」

麻美が激しい勢いで注入されてくる冷水にうめきを上げ、全身をよじる。見る見るうちに彼女の下腹部は盛り上がり、その膨満感に彼女が苦しげな声を上もらす。

「もう、もう一杯……、ゆ、許してえ……」

麻美の懇願の声を聞いた後、美佐子が更に数瞬の間ホースを押しつけ、冷水を注入してからシヤワーを止めた。

ホースが外されたその瞬間、彼女の肛門は激しい勢いで冷水を吹き出し、その痴態の全てを撮影している平尾の足元近くまで飛沫を飛ばした。

苦痛と恥辱により、全身の力を絞り取られた麻美が、洗場に崩れるように身体を倒していく。

ビデオカメラのファイダーから顔を上げた平尾が美佐子に言った。

「撮影を代ってくれ」

平尾が洗場にうつぶせに転がる麻美に歩み寄り、投げ出されるようにタイルの上に伸びている彼女の足を軽くはたくように蹴って、開かせる。

うつぶせのままに身体を横たえ、両脚を大きく開かれた麻美の脚の間に、平尾が屈み込む。背後から恥部を覗き込まれているのを知りながらも、恥辱の極みを味わされ、女性としての全てを奪い取られた麻美は、抵抗する気力も見せなかった。

平尾は、目の尻房を両手で鷲掴みにし、柔らかな尻肉に5本の指を食い込みました。続けて彼は、両手に掴んだ尻肉を強く左右に割り、その中心で歪む肛門を視姦する。

股間の肉が押し分けられた事により、性器の縫われた肉襞が引きつり、麻美が低いうめき声を漏らした。

「尻を上げる」

命じられるままに、のろのろと腰を浮かした彼女の下腹部に、平尾の手が後ろから回り込み、性器の肉襞の狭間に埋まった陰核に触れる。

麻美がピクンと身体を震わせて反応し、平尾がニヤリと笑いながら、もう片方の手で彼女の肛門に触れた。

「ここに突っ込んでやるよ。このきっちり締まった穴に、オレのものを押し込んでやる」

「うう……」

麻美がすすり泣く。

陰核と肛門を弄る平尾の指の動きは、巧妙でそして執拗だった。

蹴られる麻美の股間に、じわりとした快感が湧きあがり、背筋を通って全身に広がっていく。麻美が唇を噛む。彼女は自分の感じている快感を、平尾には教えたくなかった。これほどの肉体的精神的責めを自分に加した男の指に、自分が快感を覚えているなどという事は、決して悟られたくなかった。それは彼女にとって、最後のギリギリの抵抗であった。

しかし……。しかし身体はそんな心とは関係なく、ゆつくりと、着実に反応を示していく。

平尾は、指を這わす性器が潤いを滲ませはじめている事に気付き、陰核への愛撫をもっと軽やかなものにする。

「うう……」

麻美がしばらくそのもどかしげな愛撫に耐え、どうしてももれてしまう快樂の声をかみ締める。

平尾の陰核を愛撫する指に、固く芯をもったような手触りが生じ、縫われた性器の肉襞の狭間から、透明で熱い粘液が滲み出す。

平尾が愛撫を強める。

「ああ！」

麻美が強く唇を噛み締め、鼻孔から強い息遣いの音が漏れた。その時、平尾が彼女の肛門に指を差し入れ、浅い部分を指の腹で擦り上げる。

「ああ……」

2つの個所を同時に蹴られる快樂に、麻美が遂に声を上げた。

そんな彼女に、平尾が命じる。

「尻を上げる……。もっと蹴ってやるから」

「ああ……。許して……」

麻美が哀願の声を囁きながらも、熱く火照っている尻をゆつくりと持ち上げた。

平尾が深く彼女の肛門に指を挿し入れ、その指を握ね回すように動かします。

二度の恥辱によって抵抗を少なくしていた彼女の肛門は、平尾の指によって、その内部の赤い肉色までを剥き出しにされる。

平尾が、彼女の前を蹴っていたもう片方の手で、性器の粘液を掬い取り、自分の張り詰めきっている亀頭に塗りつける。先端の窪みから滲みだしていた彼の粘液と、麻美の愛液が混じり合い、亀頭が鈍く光った。

「さあ、いくぜ」

平尾が腰を上げ、麻美の肛門に亀頭を触れさす。

「ああ……。お願い、お願いやさしくして……」

「フツ。それはお前次第さ。」

平尾がゆつくりと腰を押し進め、亀頭の先端が肛門に微かに埋まる。

「あっ！ 無理、やっぱり無理です」

「さつき教えたよな、尻に入れられるときには、どうしろと」

麻美がゴム栓を埋められたときのことを思い返し、深く大きな息を吐く。

「そうだ。そうすりゃ、少しは楽になるだろうぜ、少しはな」

平尾が腰を推し進め、彼女は、引き裂かれるような痛みを耐えるうめきを漏らしながら、背中
で拘束された手を握り締める。

肛門を押し広げられる感触、そして熱い肉の剛直が自分の腹の内部に侵入してくる時の甘い疼
きにも似た痛み、肛門の内側を擦り上げられる時の快感。絞り出されるように、股間からしたた
り落ちる愛液の熱い感触。内臓を押し上げられるような奇異な快感。そして、平尾の下腹部が自
分の尻肉に触れ、歪む感触。

平尾が陰茎を収め切った時、彼女は熱い吐息を吐き、我知らずの内に、強く肛門を引き絞って
いた。

陰茎に強い圧迫を感じ、そこから生じる甘い快感に平尾がうめきの声を漏らす。そして尻を犯
された麻美は、肛門で彼の陰茎の固さと、その熱さを感じた。

「そうだ、そうして尻を引き絞れ、尻を使って男を楽します術を憶えるんだ……」

平尾が欲情が滲む声で彼女に言い、その腰を手強く掴みながら、腰を振り始める。

「ぐっ……」

肛門に挿入された陰茎が引かれ、そして再び強く押し込まれてくる時の、腹の内部を突上げら
れるような感触に、麻美が喉から押し出されるような息を吐く。

平尾が腰の動きを早め、それに従って彼女の喘ぎ息が激しくなっていく。その中で彼女は、尻
の感触に憑かれたように肛門を強く引き絞る。

縫り合わされた何十本ものゴムが締め付けてくるような彼女の校門の感触に、平尾が強い快感
を覚え、興奮した息を吐く。

「もっただ、もっと締めろっ！」

まだ生殖器に男を受け入れた事のない少女の肛門を犯しているのだという昂ぶりと、その味わい
に、平尾が急激な射精の衝動を感じる。

平尾の腰の動きが更に速くなり、そして彼は前から回した手で、彼女の陰核に触れる。

そこは熱い粘液にまみれていた。

生殖器に触れられた快感に麻美がビクリと尻を振り、そして更に強く肛門を引き絞る。

「おおー！」

平尾が快感のうめきを上げながら、熱いしたりに濡れた陰核を摘まみ、そして突起した肉の
尖りを力を込めて捻り上げる。

「ヒッ！ い、痛いっ！」

麻美が叫び、そしてその瞬間彼女の中で、陰核の強い苦痛と尻の快楽が混ざり合い、それが腰の中央で融合する。

強い絶頂感が生まれた。

「ああっ！……」

麻美の声の語尾は、快楽の色合を濃く滲ませたものだった。

その瞬間、平尾は強く腰を押しつけ、麻美の尻肉の弾力と、痙攣するように震える強い肛門の締め付けを味わいながら、彼女の腹の奥底に白濁を放つ。

長く続く射精の快楽に平尾が固く目を閉じ、喘ぎの声を上げる。

彼の漏らした熱い息を聞いた時、麻美ははつきりと腹の奥で、彼の射精を感じ取った。

そして彼女は、自分の中にただ一つ残された防御の壁が、微塵に打ち砕かれた事を自覚する。

麻美の唇の端から、一筋の涎が流れ落ちていく。

射精の余韻を堪能した後、満足しきった者の表情を浮べた平尾が、麻美の尻から陰茎を抜き出す。

その受けた扱いによって、しばらくの間、開いたままになった彼女の肛門から、その内側に放たれた白濁が零れだし、性器に垂れ下り、そこで愛液と混じり合う。

「……」

声にならない声を漏らした彼女の、精液に飾られた肛門が、ゆっくりと閉じていく。

全てを撮影していた美佐子が、深く長い溜め息を吐いた。

以下、次回へ